

「ぼっ」というくぐもった音と共に、あなたがSabaの泡立つ蜜穴からその熱い肉棒を引き抜くと、背後で突然「ガタン」という大きな音がした。慌てて振り返ると、Doobyが顔を真っ赤にして床にへたり込んでいるのが見えた。

うう...わ、私はケーキを取ったらすぐに行きます...店長が...そ、そんなえっちなことをするのを邪魔しませんから...どうか私を食べないでください...

わあ  
あ  
見  
て  
お  
い  
て  
す

ト  
キ  
ト  
キ

ぼっ

Doobyは床から立ち上がろうとするが、両脚が砕けたように力が入らないことに気づく

あ...あれ...? た...立てない...どうして...? Doobyは悪いことしてないのに...どうして下の方が...こんなに熱くなるの...

グ  
ル  
グ  
ル

彼女は無意識に脚を固く閉じるが、その熱い流れが脚の間から湧き出るのを止められず、布地を通して、透明な液体が床を濡らした。

雄々しい汗の匂いと圧迫感を纏いながら、一歩一歩Doobyの前に進み、その華奢な足首を掴んで両脚を高く持ち上げ、勢いのままに規定違反のスイムショーツを膝まで引きずり下ろした。

きゃあっ！そこ見ないで…！そこは…Doobyがおしっこするところ…恥ずかしすぎる…店長には見せられない…！

だわ♡

だわ♡

カアッ♡

Doobyの愛液は壊れた蛇口のように大量に溢れ出し、会陰を伝ってピンク色のアナルまで流れ落ちていく

うう…こんなつもりじゃなかったのに…おまんこが…おまんこが勝手に濡れちゃったの…店長の大きいおちんちんを見たら…勝手によだれが…♡♡

じわっ♡

口では自分の体の反応を責めているDoobyだが、そのぷっくりとした陰唇は空気中で微かに震え、呼吸するかのように開閉し、まるで無言であなたの侵犯を誘っているかのようだ。

あなたは濡れそぼった秘密の花園をすぐに攻めることはせず、逆にDoobyの胸の覆いを引き剥がし、ほどよく発育した真っ白な乳房を露出させた。そして、とっくに勃起していた乳首を正確につまみ、乳輪ごと揉みしだき、回転させた。

やあんっ——！！そこは…そこはDoobyが将来赤ちゃんにあげるための…つまんじゃだめ…！ああ…！

乳首を挟まれた瞬間、Doobyは背中を反らせ、電流が体を駆け巡った

おっぱいが…店長の手の中でとろけちゃいそう…こんなことされたらDoobyは本当に……悪い子になっちゃう…！

時に激しく、時に優しく、あなたは繰り返しDoobyの敏感な部分を刺激する。固く閉じていた彼女の両足も次第に緩み、蜜の穴もさらに赤く腫れ上がり、あなたの進入を迎え入れる準備が整ったようだ。

そっ…だめ

ぐにゅ

びしょり

発情したDoobyを見つめながら、あなたはその太い指を彼女の胸から離し、収縮を繰り返して蜜を吐き出す膣口にゆっくりと押し当てた。「ぶちゅ」という軽い音と共に、指の関節が幾重にも重なる緻密でピンク色の媚肉を無理やりこじ開け、その温かく湿った秘密の通路へと滑り込んだ。

体がおかしくなっちゃった

わあ…！店長の…指が…Doobyのお腹の中に入ってきた…！中の肉が…店長に…気持ちよくされちゃって…

指が敏感な内壁を掻き出すたびに、大量の粘り気のある糸を引く透明な液体が流れ出る

お願い…店長…Doobyも…Sabaちゃんみたいに…おまんこで…店長の大きいおちんちんを食べて…お腹を大きくされて…店長専用の肉便器になりたい♡

ピクツ

おまんこ

じゅぶっ  
じゅぶっ

Doobyの欲望は完全に羞恥心に打ち勝った。彼女は濡れた瞳であなたに懇願するよう見つめ、自身の花芯をあなたの太い雄の生殖器へと向けた。

Doobyのさっきの恥知らずなおねだりを聞いて、あなたは逆にそばにあった、さっきSabaを何度もイかせたピンクのローターを手を取った。最大強度に設定し、容赦なくDoobyのクリトリスを攻め立てる。

ひいいいいー！だめ！振動が速すぎる…！Doobyのクリちゃんが…気持ちよすぎて壊れちゃう…！

あなたはわざとローターの先端で彼女の唇をなぞるように往復させ、Sabaのねっとりとした液体を彼女の花びらにまんべんなく塗りつけた

全部Sabaの匂い…！Sabaのおまんこ…とDoobyのおまんこが…間接キスしてる…嬉しい…気持ちいい…

快感は強いものの、空っぽの膣内はまだ満たされることを渴望している。彼女は腰をくねらせ、ローターの束縛から逃れようとしながら、あなたの青筋が浮き出た本物のおちんちんを切なげな眼差しで見つめた。

びびっ♡

あま

え？おちんちんちゃん？

は♡

は♡

ウイーン♡

じゃわ♡

あなたは慈悲深く、Doobyが夢にまで見たおちんちんを、開いたり閉じたりしている花びらに狙いを定める。キノコのように巨大なカリで締まった唇を無理やりこじ開け、「ぷちゅ」という音を立てて温かく湿った膣の入り口に押し入れた。

はあっ……！ やっと…店長の…太いおちんちん…熱い…お腹がいっぱいに膨らんでる…やっとイける…

彼女があなたが勢いよく奥まで突き刺してくると思った瞬間、あなたは亀頭だけで入り口を抽挿し始めた。

店長…意地悪…はあ…亀頭だけでセックスなんて…ひどすぎる…！ お願いします…店長…Doobyを思いっきりイかせてください。

ぬちゅっ♡

とろっ♡

あ♡

ひどい♡

あ♡

あ♡

じゅぶっ♡  
ずぶっ♡

ぷるん〜♡

彼女は恥を忍んでかかとであなたの背中に絡みつき、自分の方へ引き寄せようとする。下半身は自らあなたの動きに合わせて、その濡れたおちんちんの上で夢中で擦りつき、もっと深く飲み込もうと試みた。

Doobyの体が極限まで焦らされたとき、あなたはおちんちんを根元まで蜜壺に挿入し、狂ったような抽挿を開始した。

どしんっ♡

どぶっ♡

まやあああ♡♡♡♡♡

奥まで…！深い…！これ…！…店長が…あたしの中に…Dooby、めちゃくちゃにされちゃう…！

あなたの亀頭は無情にも彼女の子宮口を抉り、子宮は圧迫されていき、変形する。

ひどい♡

は♡

どぶっ♡

いく…Dooby、本当にイっちゃう…！店長も一緒にいく…？店長のミルク…全部Doobyにください…Doobyを妊娠させて…♡

最後の一突きと共に,Doobyの体内で巨大な肉棒が深々と突き上げられ,その豊かな子宮口を完全にこじ開けると,熱く濃厚な白濁した精液が,グラウトのように馬の目から激しく噴射された。

ん!んんんー!

来た…!ミルクが…中に…!  
Doobyの小さな子宮に直接流れ込んでくる…!熱い…熱いよ!

あなたが絶え間なく脈打つように射精を続けるにつれて,彼女は子宮がどんどん大きく広げられていくのを感じる

はあ…!溢れちゃった…もったいない…Doobyは全部飲みたい…体中を…店長の匂いで満たして…店長のミルクケーキになりたい…♥

彼女は自分の体から流れ出る濃厚な液体を,うっとりとした眼差して見つめていた.指を伸ばしてその白いエキスを少しすくい取ると,口に入れてしゃぶり,恍惚とした淫らな笑みを浮かべた。

今日はカフェの重要な「裸エプロンデー」。あなたが休憩室のドアを開けると、目に飛び込んできたのは、ポテトチップスの袋を手に、夢中で漫画を読んでいるサボり中の「サメ」だった。

ん…(もぐもぐ),あ…店長さん…一緒にポテチ食べます?

Sabaはポテトチップスを一枚口に入れ、「カリッ」と軽快な音を立てた

あ…パレちやっただ

こいっ

ふん

わ…私はサボってなんか  
ない!!これは仕事前の精  
神統一なの,わかる?

さらにあなたを悩ませたのは,Sabaがエプロン  
の下で全裸ではなく,水着を着ていたことだ。  
これは明らかに今日のルールに反している。

あなたの不機嫌な顔に気づいたSabaは、今度こそ本当に怒られるかもしれないと思い、いたずらっぽく上半身の水着をずらした。布で覆われていたピンク色の乳首が、胸と共にあなたの目の前に晒される。

どうっ？  
お得意じゃあ？

うわ…店長の顔、すごく怖いよ。ほら…いいものを見せてあげるから…機嫌直して？♡

Sabaはそう言いながら、水着のボトムにきつく包まれた真っ白なお尻を揺らした

もじもじ♡

ぽん♡

店長も見たんだから…その代わりに、この最終話を読み終わらせて？♡

Sabaは不満そうな顔で、饅頭のように小さく形の良い胸を揺らし、潤んだ大きな瞳であなたに懇願した。

彼女の控えめな胸の誘惑に対し、あなたはそれでは彼女の違反を償うには誠意が全く足りないと感じた。不意を突いて、あなたはSabaのお尻の布を素早く脚の付け根まで引き下ろした。

えっ?! 待って! 店長?! それは反則だよ! きゃーっ! そこ! そこはまだ見せる準備ができてないってば!

そっちは見ないで

Sabaは慌てふためいたが、それはとっくに濡れて熱くなっていた股間を見られたからだった

うう…見られちゃった…おまんこがびしょびしょなところ…わざとじゃないの…

ただ、ただ漫画がちょうど…そういうシーンだったから…

Sabaの興奮で充血した濡れた貝はかすかに震え、彼女の荒い息遣いに合わせて、さらに多くの蜜を絶えず搾り出していた。

あなたはこの淫らな小サメの「火消し」を先にしてあげようと思った。さもないと今日の店の営業がままならない。あなたは秘蔵のマッサージ棒を取り出し、「微振動」モードに設定し、その秘裂に当てた。



反則だよ  
ひどい

し、女ももも

店長ひどい…お店にいつからこんなものが!?

突然の刺激にSabaは抑えきれず潮を吹いた

ピクピク

お水…お水が出ちゃった…!  
店長の前で…Sabaのおまんこ…イっちゃった!!

おまんこ

フイフイ

Sabaの顔はオーガズムで赤く染まり、蜜穴は潮吹き後さらに多くの愛液を分泌し、絶えず外へと流れ出し、まるであなたに更なる接触を求めているかのようなようだった。

オーガズムを迎えたばかりのSabaは、脳がショートしたのか、不意にあなたをソファに押し倒した。待ちきれない様子であなたのズボンを引き下ろし、すでに赤く膨れ上がった太い肉棒を取り出すと、顔を近づけ、ピンク色の柔らかい小さな舌先を伸ばした。

店長は、おっぱいだけじゃ物足りないんですよね…  
だったら、こうしたら…

Sabaは舌で敏感な尿道口を優しくつつき、くるくると回す

ん…店長の先走り汁…しょっぱい…えっち…じゃあ、Sabaがいただきます…

Sabaは八重歯を見せ、小さなお口を開けて、あなたのそそり立つ巨根にゆっくりと迫っていく。

Sabaは濡れて赤くなった桜色の小さなお口を限界まで開き、ゆっくりと大きな亀頭を飲み込んでいく。口腔内に入ると、Sabaが頬で吸い付いてくるのを感じ、すぐに喉の奥に突き当たった。

んん…んぐっ…！店長の…おっきすぎて…喉の奥まで…で、でも…Sabaは…負けません…！

Sabaは口腔内を締め付け、上下に激しく吸い付き始める

Sabaのお口のおまんこ…気持ちいいですか、店長？…店長の先走り汁、すごい…

いきそうになったら…我慢しないでいいですよ…私の口を…オナホールだと思って…

ずるずる

ぐんぐん

淫らな言葉を口にしながら、Sabaは頬の筋肉で肉棒を締め付け続け、柔らかい両手で口のリズムに合わせてあなたの根元を素早く扱っている。

我慢の限界が崩壊したその瞬間、溜まりに溜まった濃厚な白濁がSabaの脆弱な喉の奥を直撃し、大量の「店長ミルク」がその華奢な食道へと絶え間なく注ぎ込まれる。

んっ!んぐ!んんー

いった…熱い…直接…喉に…! 飲み込む暇も……!

最初の一筋の熱い流れが喉を直撃した時、Sabaの目は一瞬虚ろになった

じゅちゅ…じゅちゅ…まだあるの? まだ終わってないの…? Sabaが全部飲むから…店長の…ミルク…濃くて…大好き

どろどろ

どろどろ

くぼ

どろどろ

どろどろ

んん

んん

あなたの肉棒がまだ微かに痙攣し、まだ精液が残っているのを感じると、彼女は力強く吸い込み、舌先を尿道口で狂ったように回転させ、最後の一滴まで搾り取ろうとした。

Sabaの口の中で爆発したばかりのあなたは、このエッチな小サメちゃんをここで終わらせるはずがありません。あなたはSabaをさっと抱き上げ、窓際の仕事机の上に置きました。窓の外は賑やかな通りで、太陽の光がSabaの小柄な体に降り注ぎます。

ちょ、ちょっと待って！店長？！ここでやるんですか？窓…窓の外は人がいっぱい！見られちゃいます…！

Sabaの濡れた秘部は太陽の光に照らされ、ことさらに誘惑的に見える

店長の…おっきなちんちん…ずっとクリちゃんを叩いてる…これっていじめてるんじゃないですか…？ひ…ひどい…

あなたは射精したばかりで、まだ一部の精液がついたままの肉棒で、Sabaのか弱い秘部を絶えず擦りつけ、叩きます。クリちゃんが刺激されるにつれて、Sabaの蜜穴は開閉を繰り返して、さらに多くの蜜をしみ出させます。

Sabaがまだ口で文句を言っている最中、あなたは不意に肉棒をその二枚の陰唇の間に埋めました。巨大な亀頭が彼女の幾重にも重なった媚肉を押し広げ、ゆっくりとその温かく引き締まった膣道に押し入っていきます。

んっ…！店長のちんちん…入ってきた…おっきい…うう…♡

これじゃ生ハメじゃないですか…中の肉が…全部押し広げられちゃってる…♡



どぶっ♡

おっきい♡

はあ♡

あなたの進入によってSabaの瞳孔が収縮し、息を呑む

ぽよん♡

ぽよん♡

やあ…見ないで…Sabaのまんこ…すごくえっちになっちゃってる…ぐちゅぐちゅって…店長のちんちんを食べてる…♡♡

あ♡

すぽ♡

すぽ♡

すぽ♡

あなたはSabaの体内で抽挿を始めます。引き抜くたびに大量の体液が持ち出され、キラキラと光る糸を引きます。Sabaは引き出される淫水を見つめ、恥ずかしそうに頬を赤らめました。

あ♡

Sabaが絶頂に達して叫んだ瞬間、あなたも爆発の臨界点を感じました。あなたは彼女の両脚をさらに大きく開き、肉棒を彼女の花芯の奥深くにしっかりと押し当て、その熱い精液を次から次へと肉穴の中に噴射します。

じゅぽっ

は  
妊  
娠  
し  
ち  
や  
う

また母の  
熱い店長  
のミルク

ピク  
ピク

ピク  
ピク

また来た…！いっぱい…！直接子宮の上に入っちゃった……お腹が…店長のミルクでいっぱいになっちゃう…！

だめえ…頭がくらくらする…気持ちいい…店長…Sabaをめちゃくちゃにしてください…Sabaを…店長専用の肉便器に…してください…♡

射精が終わった後も、あなたの肉棒は肉穴の中に留まり、彼女の膣壁が絶頂後に痙攣する余韻を味わいます。Sabaは泥のようにぐったりとし、目は虚ろで、小腹は精液で満たされたために僅かに膨らんでいました。



































